

発表者 藤原 孝弘

テーマ 「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について、教師の心を考えながら意見発表させていただきます。

このテーマで思うのは、障害を持つ子どもたちへの特別支援、発達障害、不登校生徒、経済的な要因による学習不適應、そして性的少数者や外国籍の生徒たちへの支援です。

文科省によると、発達障害の小中学生は全体の8.8%だそうです。1クラス3、4人です。2023年度の小中学生の不登校は全国で34万人。過去最高でした。今、私が勤務している中学校でも、保健室登校も含めて、授業に入れない子が各クラス4、5人います。保健室の先生の約4割が性別に違和感のある子と直接関わったことがあるそうです。中野区における外国籍の方の数は2万4,000人。区民の7%と聞きます。学校現場でも、これらの課題に対応しようと、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの福祉の人たちと協働するなど、様々動いてきました。それによって多くの人を支えることもできました。中野区でも様々なシステムが整っていると伺っております。と同時に、関わる教員が何を感じているのかということに、もっと関心を向けなければならないとも感じています。

例えば教員には、それら普通とは違う印を持つ子どもたちを見て、「面倒だな」、「じっと教室にいられない困った生徒だ」、つまり面倒、嫌なことと捉えてしまう心があります。それが子どもたちに伝わり、どんなに支援されても、子どもたちは「自分は嫌われている」というメッセージを受け取ってしまいます。一人ひとりのニーズにどんなに対応したとしても、根本のところでおかしなことをしていることになります。

私は、大学院生の頃に、数年前に亡くなられた宮城まり子さんの設立された、ねむの木学園を見学させていただいたことがあります。そこで見たまり子さんの音楽の授業はすさまじいものでした。障害のある体のリハビリも兼ねて、楽器を叩かせたり、踊らせたりしようとまり子さんがリードをするのですが、そのまり子さんの全身から「あなたたちはそのままですばらしい」、「あなたたちには力がある」、「あなたたちにはできる」、「私はあなたたちを心から愛している」という思いが、ほとぼしり出ます。そのまり子さんの心に応えて、生徒さんたちが動かない体を必死に動かそうとします。少しでもできると全身で喜びを爆発させます。見ていた私たちは泣けて泣けて仕方がありませんでした。人が人の可能性を信じて愛することの力のすごさと、それは必ず相手に伝わるという、絶対の信頼とを目の前で見せていただいたのだと思います。それは1人の人から1人の人へと伝わるという教育の原点で

した。

まり子さんは障害を持つ子どもたちが持ちやすい「自分たちは一般の人たちより劣っている」と思ってしまう痛みに寄り添い、どんな自分でも、今、成長することができるという最も大切な体験をさせてあげようとしていました。そこには私たちが陥りやすい「劣っている人たちは解決すべき問題であって、それを援助してあげる」という上から目線の傲慢さも、ましてや面倒くさいも嫌なことはありませんでした。それどころか、障害を持つ子どもたちを一人ひとりかけがえのない存在と捉え、あなたの本質と出会えるのがうれしいという、生命の畏敬とでも呼ぶしかないものをお持ちでした。それを持てることこそが、教育の本質的な喜びだと思います。

私たちも皆、本来的にその畏敬の思いを持っています。教育を志望した人たちは皆そうです。それを思い出していただかなければなりません。一人ひとりのニーズに応えるとは、一人ひとりをかけがえのない存在と思える心を取り戻すということだと思います。そのためには、教育は何のために行われるのかを、不断に教員が学ぶシステムと支援、そのための人員の増強、時間数の削減などの時間的余裕が必須となります。そのときに、効果的に生徒に知識・技能を教え込むという工場の教育観から脱皮していけます。教師が教育の本質的な喜びを取り戻す。そして元気になる。そこから教育は再興していくと思っています。それを中野から始めたいと思います。

区 長      ありがとうございます。私もねむの木学園に行ったことがあります。宮城さんとはお会いできなかったのですが、まだいらっしやいました、そのとき。教師が教育の本質的な喜びを取り戻す。これは、失ってしまったのは何ですか。

藤 原      いろいろあると思うのですが、1つは教育の目的観。さっきも申しましたけれども、やはり工場的に知識技能を教え込むのが教育だという、この100年以上の、日本における教育観が、いまだに、少しずつ、少しずつ、それに対して疑問は投げかけられていても、いまだに続いている。ましてやこのところの新自由主義的な動きの中で、ますます強まっている部分もある。ですから、教員が生徒と出会い、その生徒の中にある目には見えづらい可能性が見えるようになるということが、本来の、本質的な喜びだと思っています。

区 長      最後に、こういう一人ひとりの教育を行うためには、投資が必要だと。投資というか、つまり教員の数だとか、働き方だとか、

いろんなところに投資が必要だという。これは有限なのですがけれども、そこはもし教育委員になられたらとしたら、どうやってまずは取りかかっていきますか、

藤 原      その部分と、同時に、教員に対する教育の目的観についての断続的な研修、学びの場。まずその前に、教師って本当に一人ひとりが今、自信を失っていますから、自分の悩みを聞いてくれる場所をまずつくって差し上げて、その悩みを把握して、なおかつ本当の教育の喜びは、今の100年間続いた学校教育の中とは違うところにあるのだよという部分で、励まして実践に持って上げてあげる。ですから、そんなことを思っています。

区 長      経歴を見ると、長年、社会科の先生としてずっとやられていたということで、そういう現場で働いていて、この教育観に対する疑問というのはずっとお持ちだったということですか。

藤 原      そうですね。40年ぐらいやっていましたけれども、最初はもう夢中だったのですがけれども、でも、やってもやっても、例えば子どもたちが応えてくれないとか、そういう中でやろうとしている自分の教育自身がどういうものだったかを振り返らざるを得なくなったと。